

国体論及び 纯正社会主義

北輝次郎著

樋口慎也訳

はしがき

本書は、北一輝（本名は北輝次郎）『国体論及び純正社会主義』の全訳である。

本書の底本としては、『北一輝著作集第一巻』（みすず書房・一九七四年〔初版一九五九年〕）を用いた。

原著では、章立てがなされ、小見出しがついている。小見出しを残すというのも一案であるが、章の中の議論を一塊として区分したものではなく、議論を理解するにはあまり有用とは言えない。しかも、小見出しの数はあまりにも多いため、これを残すと、かえって読解の妨げになる恐れがある。以上の理由から、小見出しを省略して節に分けることにした（章はそのままである）。節に組み替えることにより、議論を一塊で理解すれば、他の箇所ではなされている議論との関連も理解しやすくなるだろうとの配慮による。ただ、このような改変は、場合によっては原著の議論の意図を誤って伝えてしまう恐れがある。そのため、原著を不用意に改変するものとの譏りを受けてもやむを得ないものと考えているが、この点については、読みやすくするための一つの実験として許しを請いたい。

新たに節を創設することに伴い、本文の段落はかなり変更したが、それ以外は極力原著の区切り方を尊重した。カッコ書きも原文のままにして、訳者が付け加えることは極力控えた（ただし、文章の流れをわかりやすくするため、場所を移動させたものもある）。ただし、原文のままにしておく、意味がつかみにくくなる場合には、訳者が新たにダッシュを付け加えたところもある。

『国体論』には現代語訳はおろか、注解さえもないことを考慮し、人物や歴史上の出来事などについてできる限り細かく注記し、注釈書としての性格も持たせるように努めた（明らかな引用誤りなどについては、本文を修正の上、その旨を注記した）。古典の引用についても、可能な限り、文献を特定した。ただし、訳者の能力に限界があるため、注記は不十分であることをお詫びしておく（特に、海外の学者の人名や地名などについては、特定しきれなかったものが多い。完全な注釈については、将来の研究に期待したい）。なお、訳者が翻訳の際に困った箇所については、できる限り原文の表現を載せ、現代語訳の妥当性が評価しやすいようにしておいた。

固有名詞などの表記については、現在読み慣わしている言い方（例えばプラトンをプラトニ）に改めた。原則として改めたことは記さないが、必ずしも明らかでないものなどでは注記し、英語読みを原語読みを読み替えた（シセロをキケロと読み替えるなど）時なども注記した。

本文はできる限りわかりやすい表現になるように心がけた。言葉不足や文章のねじれにより、そのままでは意味が通じない時には原文にはない表現を付け加えたり、思い切って意識をおこなったりしてある（そのため、原文とはかなり表現が異なる部分も多い）。また、原文は非常に長い文章が多いが、これも難解さを助長していると思われるので、文章一つ

一つを短くし、意味がわかりやすいように心がけた。

なお、同じ語句に対して徹底して同じ訳を当てていないので、文章によって表現に違いが生じていることもある。文章の意味を理解しきれていないところもあるだろう。また、意味を取り違えて、誤訳をしている恐れもある。素人による数々の困難に晒されながらの現代語訳であるから、現代語訳としては甚だ不十分で心許ないものであろう。学術的な価値を持ちうるかもわからない。しかし、たとえ駄作であるとしても、初めの一步は重要である。ワットの蒸気機関は、時速四キロしか出ない玩具のような代物でしかなかった。しかし、その成果は蒸気機関の発達のきっかけを与え、やがては産業革命をもたらした。それと同じように、『国体論』の初の現代語訳は、北一輝研究の新たな展開としては全く無意味とは言えまい。本居宣長も、『うひ山ぶみ』において、「みづから物の注釈をもせんところかけて見るときには、何れの書にても、格別に心のとまりて、見やうのくはしくなる物にて、それにつきて又外にも得る事の多きもの也。されば、其心ざしたるすぢ、たとひ成就せずといへども、すべて学問に大きに益あること也。」と述べている。宣長の、「たとひ成就せずといへども、すべて学問に大きに益あること也」という言葉に勇気づけられて、この現代語訳を公にしようと決意した次第である。

現代語訳の妥当性については、見直しが将来の課題として残されるが、誤りをご指摘頂くなり、学者の研究に基づく現代語訳の作成を期待することとして、お許しを願いたいと思う。

平成二三（二〇一一）年 八月二十八日 樋口慎也

本書の構成

緒言

第一篇 社会主義の経済的正義

第一章

- 1—1 現代社会において秩序、平穏さは成立しているのか
- 1—2 貧困の原因
- 1—3 現代における資本家の存在とはいかなるものか
- 1—4 現代版奴隷制度の成立
- 1—5 転倒した個人主義
- 1—6 自由競争の欺まん

第二章

- 2—1 封建制が打破された後、何故経済的貴族国が成立したのか
- 2—2 貴族国の成立を支えるもの——機械工業の発展——
- 2—3 資本による土地の収奪とその結末
- 2—4 資本家間の競争とそれによって引き起こされるもの
- 2—5 資本家同士の競争がいずれは停止する理由
- 2—6 権利思想の変遷
- 2—7 社会主義を批判する者の論理矛盾
- 2—8 社会主義の権利論

第三章

- 3—1 社会主義の労働方式
- 3—2 社会主義を批判する論者の代表者の指定
- 3—3 金井延博士の議論への反論——社会主義は労働者主義ではない——
- 3—4 資本と資本家を混同する無知
- 3—5 田島錦治博士の議論への反論——利己心のみで人間を語ることは、人の性質を理解しない議論である——
- 3—6 労働を神聖なものにするための条件
- 3—7 利己心の転換に関する田島博士の誤解
- 3—8 万人への平等な分配——独断的不平等論の打破——
- 3—9 独断的不平等論という現状擁護の仮面
- 3—10 賃金制度と生産組合を混同するという法外な無知
- 3—11 社会主義は運営の才能を無用とするという誤解
- 3—12 インターナショナルの運動を無視する田島博士の独断

- 3-1-3 国が得るはずの利益を資本家が奪っている現在の矛盾
- 3-1-4 社会主義が官僚専制になるという誤り——社会主義の官僚は装いを新たにする——
- 3-1-5 科学的社会主義が重きを置くもの
- 3-1-6 下層階級を上層に引き上げるにはどうすべきか
- 3-1-7 小規模な資本家が残ることは、社会主義を阻止する理由となるか
- 3-1-8 総括

第二篇 社会主義の倫理的理想

第四章

- 4-1 個人主義的犯罪観の打破
- 4-2 樋口勘次郎氏の犯罪論
- 4-3 樋口氏が間違いを犯したのは何故か
- 4-4 社会の進化による犯罪の縮小
- 4-5 良心の進化と矛盾した樋口氏の刑罰論
- 4-6 現代の犯罪はどのような性格を持っているか
- 4-7 人間性はいかにして作られるか
- 4-8 社会主義下での良心形成とはいかなるものか
- 4-9 社会主義が個人主義の継承者であるのは何故か

第三篇 生物進化論と社会哲学

第五章

- 5-1 社会主義と進化論の関係
- 5-2 丘浅次郎博士の進化論について
- 5-3 丘博士のような誤った考えが出てくるのはなぜか
- 5-4 生物進化論の単位はどう考えるべきか
- 5-5 丘博士の進化論の誤りはどこにあるのか
- 5-6 国家競争の進化
- 5-7 新たな創造説と化した進化論
- 5-8 従来の進化論における生存競争論の誤り
- 5-9 生存競争の単位
- 5-10 進化論から見た個人主義と国家主義の意義
- 5-11 生存競争論の総括

第六章

- 6-1 社会主義下での個人単位の生存競争

- 6—2 現在の雌雄競争は妥当か
- 6—3 社会主義の自由恋愛論

第七章

- 7—1 人口論問題序論
- 7—2 マルサスの独断はどこが原因か
- 7—3 食糧問題について
- 7—4 競争の意味の誤解
- 7—5 下層階級はどうして人口過多になるのか
- 7—6 人口論総括

第八章

- 8—1 人口は将来どうなるか
- 8—2 雌雄競争の推移
- 8—3 社会主義によって実現される進化とはどんなものか
- 8—4 道徳の進化
- 8—5 知識の進化
- 8—6 社会主義を平民主義と考えることの誤り
- 8—7 美意識の進化
- 8—8 器官の進化による排泄作用の退化
- 8—9 どうして人は排泄を恥辱とするのか
- 8—10 交接作用の廃止
- 8—11 進化の帰結
- 8—12 総括

第四篇 いわゆる国体論の復古的革命主義

第九章

- 9—1 日本において社会主義に立ちはだかるものは何か
- 9—2 主権の本体とはなるものは何か
- 9—3 国家を進化に応じて考察する必要性
- 9—4 文字に拘泥して歴史を見る誤り
- 9—5 日本のみを特殊化する憲法学者の誤り
- 9—6 君主主権論の論理の誤り
- 9—7 穂積博士の主権論の破綻
- 9—8 元首の意義
- 9—9 帝国憲法における「最高機関」は何か
- 9—10 主権論はいかにあるべきか

- 9-1-1 国体と政体の区別の意義とは
- 9-1-2 国家の人格とはどのようなものか
- 9-1-2 社会において個々を団結させるものは何か
- 9-1-3 国家意識の覚醒はどのような経過をたどったか
- 9-1-4 社会主義と国体との関係はどのようなものか

第十章

- 10-1-1 学者が国体に関する認識を誤るのは何故か
- 10-1-2 神道的迷信に基づいて国体論に従う根拠はあるか
- 10-1-3 穂積博士の信仰と科学を混ぜた立論
- 10-1-4 国家の起源を家に求めることの誤り
- 10-1-5 革命論の内実を持つ国体論
- 10-1-6 「君臣一家論」の破綻ぶり
- 10-1-7 穂積博士の信仰は本物か
- 10-1-8 君臣一家論と忠孝一致論は整合しない
- 10-1-9 現在における君臣一家論の愚かしさ

第十一章

- 11-1-1 日本において血統主義と忠孝主義は両立したか
- 11-1-2 天皇は学理を左右する存在ではない
- 11-1-3 国体論の誤りは進化の無視にある
- 11-1-4 文字が同じならば今も昔も同じだと見なす愚かさ
- 11-1-5 歴史的自覚のなかった時代のことは除外すべきである
- 11-1-6 日本の歴史は乱臣賊子の歴史である
- 11-1-7 藤原氏による専制
- 11-1-8 僧兵の悪事
- 11-1-9 源平の台頭
- 11-1-10 足利時代の朝廷の衰微
- 11-1-12 徳川氏は決して皇室を奉っていない
- 11-1-13 新井白石の思想と勤皇家の少なさ
- 11-1-14 総括

第十二章

- 12-1-1 日本史上なぜ乱臣賊子が多いのか
- 12-1-2 血統主義と忠孝主義
- 12-1-3 有史以後の血統主義と忠孝主義
- 12-1-4 社会性の形成から見た血統主義
- 12-1-5 道徳の進化に伴って生じる忠孝主義
- 12-1-6 忠孝は経済的基礎に左右される

- 1 2—7 皇室の忠臣・義士は本当に存在したか

第十三章

- 1 3—1 「天皇」という文字内容の進化
- 1 3—2 血統主義の両面
- 1 3—3 中世の天皇は「神道のローマ法王」であった
- 1 3—4 皇統が万世一系であった理由
- 1 3—5 統治作用委任論のまやかし
- 1 3—6 穂積博士の支離滅裂な主権本質論
- 1 3—7 中世の天皇の存在意義
- 1 3—8 主権者は不変ではない

第十四章

- 1 4—1 維新期の国体論は忠の否定を目的としていた
- 1 4—2 大化革命とその挫折の理由
- 1 4—3 公民国家の形成には何が必要か
- 1 4—4 維新革命の復古的色彩は借り物にすぎない
- 1 4—5 維新革命の本来の意味
- 1 4—6 一時代の物差しで全てを押し量ることの誤り
- 1 4—7 社会民主主義からみた憲法解釈
- 1 4—8 天皇と国民の道德関係
- 1 4—9 総括

第五篇 社会主義の啓蒙運動

第十五章

- 1 5—1 法律と政治 ——国家は否定されるべきか——
- 1 5—2 維新革命の完結と現実の国家
- 1 5—3 社会主義者への迫害とそれに対する報復
- 1 5—4 啓蒙運動の意義
- 1 5—5 なぜ上層階級は社会主義を迫害するのか
- 1 5—6 普通選挙の要求の趣旨
- 1 5—7 第二の維新革命——普通選挙の実現による法律戦争
- 1 5—8 慈善活動の偽善
- 1 5—9 資本と労働の調和という愚論
- 1 5—1 0 社会主義の本義再論
- 1 5—1 1 社会主義の良心再論
- 1 5—1 2 総括

第十六章

- 1 6 - 1 孟子の理想国家論
- 1 6 - 2 孟子の社会理解
- 1 6 - 3 孟子の理想論の意義
- 1 6 - 4 孟子に対する誤解の打破
- 1 6 - 5 孟子の国家学
- 1 6 - 6 日本における孟子の受容と国家社会主義者の無知
- 1 6 - 7 無抵抗主義では社会主義は成り立たない——非戦論を駁す

緒言

現代において、最も待ち望まれているものは詳細な分科的研究ではなく、材料の羅列や事実の豊富さでもなく、全てにわたる統一的頭脳である。もちろん非力な著者がこのようなことの任務に耐えられないことは言うまでもなく、また出過ぎた真似ではある。しかし、この努力は全ての社会的諸科学、つまり経済学、倫理学、社会学、歴史学、法理学、政治学、生物学、哲学などの統一的知識の上に社会民主主義を樹立しようとしたものである。

著者は古代、中世の偏局的社会主義と革命前後の偏局的個人主義が対立し合ってきた思想であることを認めるが、それらの進化を受けて今日に到達した社会民主主義が、国家主義の要求を無視するものではない。それとともに、また自由主義の理想に背くなどと考えられるべきものではないと信じている。だから、本書は首尾一貫して国家の存在を否定する今の社会党諸氏の盲動を排するとともに、彼らのように個人主義の学者及び学説を的にして、矛を磨くような乱れた真似はしない。具体的に言えば、本書が力を用いた所は、いわゆる講壇社会主義とか、国家社会主義などと称される鶴的な思想の駆逐である。第一編『社会主義の経済的正義』において個人主義の旧派経済学について語る所は少なくし、金井、田島諸氏の打撃に多くを尽くしたこと。第二編『社会主義の倫理的理想』において、個人主義の刑法学を軽々と反駁し、樋口氏らの犯罪論を論破するに努めた。社会の部分になす個人がその権威を認識されることがなければ、社会民主主義というものもない。殊に欧米のように、個人主義の理論と革命を経験していない日本のような国は、まず社会民主主義の前提として個人主義を十分に発展させる必要がある。

第三編『生物進化論と社会哲学』は、社会哲学を生物進化論の見地から考察したものである。正確に名付けるならば、「生物進化論の一節としての社会進化論」と言うべきものである。しかしながら今日の生物進化論は、ダーウィン以後その部分的な研究においては著しく発達したにもかかわらず、全体にわたってなお混沌としている。「組織」と「結論」がないからである。だから本書は、その主要な目的が社会哲学の攻究にあるにもかかわらず、単に生物進化の事実の発見として継承されているものに整然とした組織を建て、全ての社会的諸科学の基礎とした。さらに、目的論の哲学系統と結びつけて推論を人類の今後に及ぼし、思弁的ではあるが、生物進化論の結論を最初につづったものである点において、著者は無限の喜びを持つことを隠すことができない。もちろん人類今後の進化については、今日の科学は十分な推論の材料を与えておらず、かつこのようなものの当然の結果として、著者その人の傾向に支配される所が多いことは言うまでもない。しかし、これは慎重な欧米思想家が未だ試みていない所で、後進国学者の事業として大胆な冒険である。そうであるから、著者は社会民主主義の実現が理想郷に進む第一歩となる宗教的信念であるとして、これを社会民主主義の宗教と名付け、社会主義とキリスト教との調和、衝突を論争してい

る欧米社会主義者と全く異なる別世界の戸を叩いたのである。そもそも、キリスト教が今なおかつてのローマ法王のように、欧米の思想界の上に専権を振るっていることは、あたかも日本において国体論というものが存在するのと同じである。日本の社会主義者にとっては、「社会主義は国体に抵触するか否か」の問題からすでに重荷である。さらに、「社会主義はキリスト教と抵触するか否か」という欧米の国体論を直訳的に輸入している社会主義者で、このことに困惑している者は、事情が異なるということさえも全く理解できていない。しかしながら本論はそもそも宗教論でもなく、また生物進化論そのものを説き述べるのが主題でないことは言うまでもない。人類社会という一生物種族の進化に応じた説明なのだ。著者は、哀れむべきベンジャミン・キッド¹の『社会進化論』が、人類社会を進化論で説明するダーウィン以後の大著であるとして驚嘆されている今日に、この編を仕上げたことについて少しばかり自負を持っている。

第四編『いわゆる国体論の復古的革命主義』は、日本のキリスト教について程度の高い批評を加えたものである。言い換えれば、社会主義は国体に抵触するか否かという論争ではなく、我が日本の国家そのものを科学的に攻究したものだ。欧米の国体論は、ダーウィン及びその後継者の生物進化論による長い努力を経て知識分子から一掃された。それと同じく、日本のキリスト教もまた冷静な科学的研究者の社会進化論により、速やかにその呼吸を断たなければならない。この編は著者が最も心血を注いだ所である。著者は現在の全ての君主主義論者と国家主義論者の法理学をことごとく退け、現在の国体を国家学及び憲法の解釈によって明らかにし、さらに歴史学の上から進化に応じて説明を与えた。著者はひそかに信じている。もし本書が歴史上において単なる空名に終わることがないとなれば、それは古今全ての歴史家が変わることのない定論としたものを全く逆転させ、書籍そのものが天動説に対する地動説といった歴史解釈上における一個の革命であることにある。この編は独立の憲法論として存在するとともに、さらに初めて書かれた歴史哲学の日本史として社会主義と関わりなく見ることができよう。

第五編『社会主義の啓蒙運動』は、善悪の批判が全く進化の過程に応じたものだと論じ、第二編『社会主義の倫理的理想』において説いた階級的良心の説明と相まって階級闘争の心的説明をなした。そしてさらに国家競争に論及し、帝国主義もまた世界主義の前提となることを論じた。権威を持たない個人を礎石として築かれた社会は、奴隷の集合であって、社会民主主義ではない。それと同じように、社会主義の世界連邦論は連合する国家の倫理的独立を単位としてのことである。そのことは百の川が海に注ぐように、社会民主主義は全ての進化を継承して初めて可能なのである。個人主義の進化を受けなければ、社会主義はない。帝国主義の進化を受けなければ、世界主義もない。私有財産制度の進化を受けなければ、共産社会はない。だから社会民主主義は、今の世のそれらを敵とせずして全てを含み、あらゆる進化の到達点の上に建てられるのだ。あの「社会主義の理想は可能であると

¹ イギリスの社会学者のこと。

言っても、果たして実行できるのか」というような疑惑は、今日の社会民主主義を人為的に考案されたものと理解し、歴史的進行の必然的な到達と考えないために生じるのである。本書が終始を通じて社会主義を歴史的進行に伴って説き、また多くの日本の歴史上に理論と事実を求めて論じ、特にこの編において儒教の理想的国家論を解説したことなどはこのためなのだ。

全ての社会的諸科学は社会的現象の限られた方面の分析的研究であるから、単に経済学もしくは倫理学のような一部のものだけで社会主義の論述として足りると考えるべきではない。殊に本書は、こまごまとした多くの章節、項目のような規則を設けず、議論の貫徹と詳細な説明を主眼として気ままに筆に走らせたので、一つの問題についても全部を通読した後でなければ完全な判定を下せないものが多い。もちろん千ページにわたる分厚い一冊の本²を差し出して、このような要求を敢えてする著者の罪は深くお詫びする所であるが、全世界の前に提出された大問題の攻究に対して多少の努力を避けるべきではない。著者は弁護を天職とするようないわゆる学者などではなく、またあらゆることを否認することを任務とするような革命家というものでもない。ただ、学理の導きに従って、維持すべきものは維持すべきだと説き、捨てるべきものは捨てるべきだと論じることにとどまるにすぎない。学者の論議は、法律で禁止されている以外には自由である。だから、著者は本書の議論が政府の利益に用いられ、社会党の迫害に対して口実を提供するようになって、もしくはまた社会党それ自身の不利な立場と嫌悪感を挑発するようになって少しも関わりはない。例えば、インターナショナルの大会³の決議に反して日露戦争を是認したことや、全日本国民の世論に抵抗して国体論を否認したことなどである。政府の権力であっても、特定の学説を強制することはできない。社会党の大勢力といっても、多数決をかさに着て思想の自由を軽視することはできない。一学究の著者にとっては、政府の権力とか、社会党の勢力とかいったものは、学理攻究の材料として以外に用はない。

だから、著者の社会主義はもちろん「マルクスの社会主義」というものではなく、また著者の主張する民主主義はもちろん「ルソーの民主主義」と称するものではない。著者は当然に著者自身の社会民主主義を持つ。著者は、個人としては彼らよりも平凡であることは言うまでもないが、社会の進化として見るときにおいては、彼らよりも五十歳、百歳長く生きた白髪ではげ頭の祖父、曾祖父である。

新しい主張を立てるには、当然の道として旧思想に対して排除的な態度をとらざるを得ない。誤った見解を打ち破ることは、正しい真理を表すことに先立つ。だから本書は、もっぱら攻撃的で説き伏せるような口ぶりで今のいわゆる学者階級を征服することを目的とする。

著者は、絶大な強力な圧迫の下で苦闘している現代日本の社会党に向かって、最も多く

² 原著の分量である。

³ 原文では「万国社会党大会」となっているが、国際的な社会主義運動は、インターナショナルという組織に基づいて行われていたので、意識を試みた。

の同情を傾けている者である。しかしながら、そうだからといって、彼らの議論に敬意を持つか否かは、おのずから別問題である。彼らの多くは、単に感情と独断によって行動し、その言う所も純然とした直訳のもので、特に根本思想はフランス革命時代の個人主義である。つまり彼らは社会主義者と言うよりも、社会問題を喚起した先鋒として十分に効果を認識されるべきなのである。著者は社会民主主義の忠実な下僕であろうとするため、やむを得ず同情に背く議論を展開した。そこが残念でもある。

本書で征服の目的であると言う学者階級に至っては、ただかわいらしいと言う他ない。率直な美德を極度に発揮して告白すれば——難しいことをあまりに砕こうとするようなもので、いたずらに議論の筆を汚すにすぎない感はあるが——、それぞれの学説の代表者として大学の講壇に依拠し、知識階級に勢力を持つという理由だけで指定したものが多い。自らの言葉に対する責任はもちろん負う。しかしながら、今の日本の大学教授らから一言の弁解でも来るような余地を残しておくことがあれば、それはまさに著者の義務の怠慢であって、弁解そのことが本書の不面目なのである。だから、著者はある学者——例えば丘氏のような学者——に対してはもちろん十分尊敬をして臨んだが、大体は——特に穂積氏のような学者に対しては——ひどい侮辱と愚弄を極めた虐殺を敢行した。このような学術の戦場には、通常の戦闘で適用される（戦時法規の）ジュネーブ条約⁴のような規律がないと言うからではなく、今の学者らが長い間勝ち誇っていたおごりと表に出てこない卑劣さが招いた復讐なのである。

文章は平易な説明を旨とした。しかしながら、広い心で許しを乞わなければならない所は、開放された天地で論議している学者らは想像できないような筆運びをするため、それに拘束されたこと⁵である。そのため、学者階級との対抗にあたって、土俵の七、八分までを譲り、時に力を極めて打とうとした腕も背後から肘を押さえられるというようなことが常であった。加えて、現在大学教授の地位にいる者のある者は、口で大学の神聖を唱えながら、権力者の椅子にすがり、哀泣して援護を求めるのだから、どうしようもないものである。権力者においてこの醜態を叱りつけないうちは、決して思想の独立はない。

社会民主主義を陥れるために口々に悪口を言い、国体論の妄想を伝えている日本の代表的学者であるとして指名したのは、左の諸氏である。だから、本書は社会民主主義の論究以外に、一つは日本現代の思潮評論として見られるべきものである。

金井延氏 『社会経済学』

田島錦治氏 『最近経済論』⁶

樋口勘次郎氏 『国家社会主義新教育学』及び『国家社会主義教育学本論』

⁴ おそらく戦時法規のものと思われたので、そのように意味を補った。

⁵ おそらく議論の仕方などに関する学者のこだわりに従わざるを得ないということであろう。

⁶ 原文では、『最新経済論』となっているが、田島の著作にそのような書名はなく、『最近経済論』の誤りであろうと思われるので、修正した。

丘浅次郎氏 『進化論講話』
有賀長雄氏 『国法学』
穂積八束氏 『憲法大意』及び帝国大学講義筆記
井上密氏 京都法政学校憲法講義録
一木喜徳郎氏 帝国大学講義筆記
美濃部達吉氏 早稲田大学講義筆記
井上哲次郎氏 諸著
山路愛山氏及び国家社会党諸氏
安部磯雄氏及び社会党諸氏

日露戦争の翌年春

著者